

CP-PACS 稼働終了 ～その思い出と最後に立ち会って～

浅野 朋広

(株) 日立製作所 公共システム営業統括本部
筑波情報システム営業所(当時)
北海道支社(現在)

平成 17(2005)年 11 月 21 日.

後に平成 18 年豪雪と名付けられるほどの記録的大雪を経験することなど、誰もがまだ想像すらしていなかった冬の始まりに、CP-PACS は約 10 年を過ごした筑波大学計算科学研究センターをあとにしました。

一口に 10 年と言えばあっけない気がしますが、使用され続けたコンピュータ、しかも科学技術計算のコンピュータとしての寿命を考えると、途方も無い長寿のマシンであったと断言できると思います。

CP-PACS プロジェクトは平成 4 (1992) 年に始まったと伺っておりますので、設計段階も含めると実に 13 年以上に渡るものになりました。

当然、このプロジェクトに携わった日立の営業は何人もいますが、気が付けば私が一番長い付き合いになりました。平成 9(1997)年に担当になってから、10 年近くを共に過ごしました。

この 10 年来の盟友ともいえる CP-PACS が次々とトラックの荷台に積まれていくのを見ながら、私は初めて筑波に来た日のことを思い出していました。

私は平成 9 (1997) 年 6 月にここ筑波へ赴任して参りました。

赴任の翌日、いきなり CP-PACS の停電テストに引っ張り出され、それが CP-PACS との初対面になりました。右も左も分からぬまま走り回ってお手伝いしておりましたが、随分と活気のある現場だなあ、というのが最初の素直な印象です。

この停電テストは、納入されて約 1 年を経過した CP-PACS が停電時に計画されていたシャットダウンをしなかったため、その正しい動作を確認することと、停電による温度上昇などの影響を調査する目的で行なわれました。そのため、集まったメンバーは工場の設計や QA の人間だけでなく、日立の UPS 担当者や日立電子サービスの保守員まで、総勢 20 人を越えていたと記憶しています。

私にはセンター裏口のオートロックが正常に動くかどうかを確認する為の見張り役が与えられましたが、あとは 20 人分の弁当の調達と、当時の営業担当者だった宮脇の後をただついていだけでした。

さて、肝心のテストの方ですが、仮想的な停電テストとは言え、実際に停電が起きた時と全く同じ状況を作り出し試験をしました。ブレーカが落とされると、明かりは消え、コンピュータだけでなく空調機も全て停止します。普段は話し声もかき消すほどのうさいマシン室が一瞬異様なほど静まり返り、秒刻みのカウントを繰り返す SE の伊藤の声だけが、マシン室の方からスピーカを通して淡々と響いてきました。そして数秒後には計画通りに動かない個所が次々と見付き、怒号や悲鳴にも似た声が飛び交いました。全員の表情には緊張感がみなぎっていました。さながら工場の設計現場をそのまま持ち込んだような喧騒と活気を目の当たりにし、昨日来たばかりの新参者の私は、圧倒されながらもどこかワクワクする感情を抑えられませんでした。

ここは面白い、と・・・

しかし、その数日後、今度は初めての運用連絡会議で最初のワクワク感はあるが吹っ飛びました。

それは半端な量ではない席上資料を見たときでした。今でもはっきりと思い出せます。あの頃の資料は間違いなく立ちました。それほど厚みがあったのですが、全部読むだけで一体どれほどの時間が掛かるのだろう、と本当に驚きました。実際、その頃の運用連絡会議は、資料を読み上げるだけでもかなりの時間を要しました。更に、まだネットワークマージンが安定していなかったため、それに関する議論だけでも 1 時間以上かかり、お

昼の1時頃から始まった会議は、大体夜の6時か7時くらいまで、ほとんど途中休憩も無しに続けられていました。

当時、私が赴任したばかりの頃にはワーキングは既に終了しており、筑波大と日立の間で行なわれる会議としてはこの運用連絡会議だけでしたので、それだけに内容が濃く、大変なものでした。

毎日がカルチャーショックの連続でした。しかし、そのお陰で色々なことを経験し、学ぶことが出来ました。

さて、話は変わりますが、今回のこの企画で、営業担当者としての寄稿をご依頼いただいた時、正直大変戸惑いました。何故なら、先述のとおり私は最も付き合いの長い営業担当者ではありますが、おそらく皆さんが一番ご苦労なさったであろう設計段階を知らないからです。きっと、私以上の適任者はたくさんいると思いました。しかし、CP-PACS プロジェクトの最後を取りまとめ、見送った者としての使命を果たさなければという思いで筆を執りました。ですから、CP-PACS の本当の最後を、これをお読みになる皆さんにお伝えできればと思います。

CP-PACS が撤去されていく日、現場に居合わせた私は9年という歳月を改めてかみしめました。

よく「十年一昔」と言いますが、確かにCP-PACS の性能だけ見てもそれは当たっています。CP-PACS は単体ピーク性能が300MFLOPS でした。今はパソコンでも数GFLOPS 出してしまうます。技術の進歩はすごいと思う典型的な事例です。

では、そんなにも時代遅れになってしまったCP-PACS は晩年誰にも使われなかったのかと言うと、全然そんなことはありませんでした。最後の最後まで稼働率は90%以上をマークしつづけ、驚くことに、シャットダウンの朝ぎりぎりまでジョブが積まれていたというのですから、このことからいかにこのマシンが多くの人に愛され、活躍したか想像に難くありません。

この事実は、CP-PACS プロジェクトに関わった全ての人が、どれほど素晴らしい仕事をしたのかという証明にもなったと言えるでしょう。

解体作業は手際のいいものでした。筐体が切り離され、間のネットワークケーブルは綺麗に切断されました。また、CP-PACS の心臓部であるボードのいくつかは記念品として何人かの人に分配されました。

こうしてバラバラにされた CP-PACS は、平成 17(2005)年 11 月 21 日のお昼頃には全てトラックに積み込まれ、計算科学研究センターをあとにしました。

さて、撤去された筐体の一部は、展示用に手を加えられ、照明やアクリルパネルのついた立派な展示品として生まれ変わりました。また、国立科学博物館にも寄贈され、設計仕様書と共につくば分館の所蔵庫に納められました。何年、何十年か後、誰かが CP-PACS に気付き、膨大なネットワークケーブルを見て驚きの声を上げるかもしれません。

マシン室は CP-PACS がなくなり一時は大変静かになりましたが、すぐあとに FIRST プロジェクトの新しいマシンが、さらにその数ヵ月後には PACS-CS プロジェクトのマシンが入り、あっという間に活気を取り戻しました。

時代がまた一つ入れ替わった瞬間でした。

これからも筑波大学計算科学研究センターでは、世界をリードする研究がなされ、発展していくことでしょう。いつか CP-PACS は、その長い歴史の中の小さな点に過ぎない存在になるかもしれません。しかし、CP-PACS は確かに存在し、大きな成果を残したことは決して消えることの無い事実として刻まれました。私はそんな瞬間に立ち会えたことを心から誇りに思っていますし、感謝しています。

末筆ながら、CP-PACS プロジェクトに関わった全ての方に敬意を表し、最後に立ち会う機会を与えて頂きましたことに心より御礼申し上げます。